

文構造を Anchoring Structure で捉える

Langacker(2009)では、Chomsky の助動詞構造の分析に意味的・機能的観点から考慮されていないことを指摘し、認知文法の立場から言語構造を分析するアプローチとして Anchoring Structure という新たな枠組みを提唱している。本ワークショップはこの Anchoring Structure を援用し、日本語と英語の文構造を分析することでこれまでの認知文法の分析よりも広い範囲の言語現象を射程に入れようとするものである。

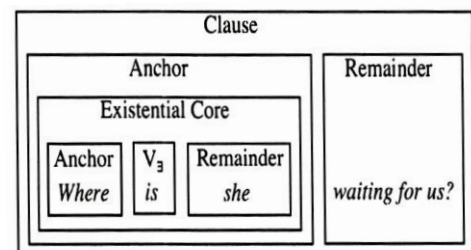
Anchoring Structure の基本的な考え方は、[Anchor + Core + Remainder]という機能的要素の配列を仮定し、この機能的要素の配列がそれぞれのレベル(Existential core レベル、節(finite clause)レベル、文(sentence)レベル)で階層を成すように文を形成するというものである。

Anchoring Structure の特徴は、意味的・機能的な側面によって、文構造が動機づけられているということにある。Core は[subject + existential verb + polarity・illocutionary force]から成るまとまりであり、それ自身で節が表わす命題のスキーマ的な表象を表すため、意味的にも構造的にも表現の中心を成している。Anchor は命題内容を理解するためにアクセスポイントとなるような談話的参照点と定義されている。Anchor の典型はいわゆる主題(Topic)であり、文や節のレベルでの主題は Anchor としての役割を担っている。しかし、常に主題が表出するわけではない。この場合には、それぞれのレベルにおける Core が自らの役割と Anchor としての役割とを合成(conflate)していると考えられる(表は節レベルの構造)。

Clause		
Anchor	Existential Core	Remainder
<i>Her sister</i>	<i>she was</i>	<i>waiting for all morning</i>
<i>All morning</i>	<i>she was</i>	<i>waiting for her sister.</i>
<i>She was</i>		<i>waiting for her sister all morning</i>

このような Anchoring Structure の観点から、Langacker(2009)は倒置(Inversion)の構造について考察している。結論としては、倒置の発生は①節レベルの Anchor が Core(つまり、Existential anchor)であり、②Core レベルの Anchor に主語ではない非典型的(non-default)な要素を取る場合であると規定されている。この倒置の引き金となる非典型的な要素とは、次に示されるインタラクティブな機能(話し手と聞き手間での命題の交渉に関わる機能)に関わる要素である(図は疑問の倒置の一例である)。

- (1) a. **Question words:** *who, what, why, where, when, how, etc.*
- b. **Negatives:** *never, nor, neither, in no way*
- c. **Restrictives:** *seldom, hardly, ever, only, few, barely, scarcely*
- d. **Positives:** *thus, there, so, truly*



このように Langacker(2009)では、言語構造を意味的・機能的観点から分析する枠組みとして Anchoring Structure を提唱しているが、この分析は認知文法の新たな試みの一つとして提案されたものであり、その細部や通言語的な適用可能性についてはまだ議論の余地がある。そこで、本ワークショップではこの Anchoring Structure の観点から日本語と英語の文構造を考察することで、既存の認

知文法の枠組みで捉えられなかった言語現象（特に文の構造的分析や談話レベルでの分析）をその射程に収めることが可能となることを提案する。具体的には、以下に示す3件の発表を行う。

まず、Anchoring Structure における付加疑問文の‘tag’の位置づけとその役割を考察する。Langacker(2009)では、付加疑問文の‘tag’について、①スキーマ的な命題内容を示す core であること、②構造が談話的・機能的観点から動機付けられていること、③交渉された命題をグラウンド化するという点で interactive な機能を担うことの3点が主張されているが、この‘tag’が Anchoring Structure のどの位置でどのような働きをするのかについては述べられていない。また、Langacker は付加疑問文の前方照応用法のみを例示しているが、付加疑問文には命題内容の報告と聞き手への質問との2文が複合された例も見受けられる(e.g. ‘I think it’s a good school, don’t you?’)。このような二つの文が複合した付加疑問文も考慮に入れ、Anchoring Structure における付加疑問文の位置づけとその役割を明らかにする。

次に、日本語の構造に焦点を当て、日本語のインタラクティブな機能の構造について考察する。英語の疑問文は、core レベルの anchor に疑問詞や existential verb を取ることで倒置が生じるが、日本語では終助詞の「～か」やイントネーションなどが疑問の標識を担うため、anchor の位置が文末に来ること予想される。また、日本語の終助詞は、場面に依存する度合いが高く、命題に対しての評価に関わる主観的な機能であるのか、他者への働きかけに関わる関主観的な機能であるのかについても連続的な様相を呈しており、英語の Anchoring Structure とは異なる機能的構造が考えられる。本発表では、Anchoring Structure の観点から日本語の終助詞の文構造とその役割を考察する。そして、終助詞が表出しない書き言葉についても考察を加える。

最後に、談話標識 I mean を例に、Langacker (2009) では示されなかった発話と発話の連続によって構築される談話構造レベルの分析について言及する。文レベルにおける anchor と anchored structure がそれぞれ参照点とターゲットであるとされるのと同様に、談話構造においても、現行談話の状況を理解するための先行発話が anchor となり、後続発話が anchored structure となると捉える。談話構造における anchor とは、先行発話の意味内容、意図、行為、フェイス、一般的知識など話し手と聞き手により共有されるすべての概念を含み、後続発話の理解の参照点となる。そして anchor と anchored structure の関係を示すのが談話標識であると規定する。これまで指摘されてきた I mean の多様な談話語用論的機能について(e.g. Schiffrin(1987)、Imo(2006)、Brinton(2008))、anchoring structure の観点から統一的な理論的説明を与えることが可能であることを主張する。

参考文献

- Brinton, Laurel J. (2008) *The Comment Clause in English*, Cambridge University Press, Cambridge.
- Imo, Wolfgang. (2006) “A Construction Grammar Approach to the Phrase I mean in Spoken English,” *GIDI (Grammatik in der Interaktion) Arbeitspapier* Nr. 4.
- Langacker, Ronald W. (2008) *Cognitive Grammar: A Basic Introduction*, Oxford University Press, New York.
- Langacker, R. W. (2009) *Investigations in Cognitive Grammar*. Mouton de Gruyter, New York.
- Schiffrin, Deborah. (1987) *Discourse Markers*, Cambridge University Press, Cambridge.